

主な記事	
ドイツとスイスの印象	1
母校を去るに及んで	3
退官に際して	4
卒業論文抄録	7
桑芽枯病研究	8
入学者卒業生氏名	14

千曲會報

昭和33年5月1日発行
長野県上田市常入
信州大学繊維学部内
編集兼発行人 小山長雄
信州大学繊維学部内
発行所 社団法人千曲会

昭和31年6月18日第3種郵便物認可 毎月1日発行 定価1部15円

ドイツおよびスイスの印象

大同染工 西島靖元

わが社と技術提携をしたスイスのヘバーライン社での技術修得のため、昨11月羽田を立ち、またこの機会にドイツとスイスの染料メーカー、機械メーカーを見てまいりました。何分にも短期間のため、上面の観察しか出来なかつたのですが、思いつくまを書き見ます。

往は昨年4月から開かれたスイス航空でマニラ、バンコック、ボンベイ、カラチ、カイロ、ジュネーブそしてここで、同じスイス航空のローカル機に乗替え、フランクフルトを経てハンブルグに到着し、ここよりベルリン、ベルリンよりハノーバーへは飛行機で、ここから再びハンブルグに汽車で戻った。この間、機械メーカー2、3を見学し、ハンブルグよりフランクフルトまで飛び、ここから約200km南のルードウィヒスハーフェンにあるBASF社を見学しました。この滞在期間はわずか10日間でした。

日本を飛つて40数時間で生活様式、環境等違う欧州にまいり、見るもの聞くもの食べるもの皆事珍らしく感じられました。私のまいりましたのは11月中旬でしたが、雪こそありませんが気温は低く、また風がひどく冷たく感ぜられました。欧州は5月頃から7月頃はどてもよい天気が続く様ですが10月下旬頃からは毎日どんより曇つた日が多く、私のドイツ滞在中はたつた半日しか太陽を見る事が出来なかつた程です。飛行機に乗ってみると、成程厚い雪が一面にひろがり、高い山のみがその上から頭だけをのぞかせていた。ドイツの生活はまず鍵で始まると聞いていましたように、ホテルに宿泊しても鍵の多いのには驚きました。なおまた工場従業員も事実大きな鍵束を持っていました。

町に行く人々は皆オーバーを着ていたが、手はポケットから外に出し何か目的を持って、ただ真直ぐ歩いていた。話声も小さく大きな声を出して笑つて行く人もありませんでした。一般に服装は若い女性および子供の一部は原色を好んで着ていますが、男は大体黒、紺が大部分でネクタイも明るい大柄なものを用いている人が少い様に思いました。ドイツの復興振りはめざましく、数年前欧州を視察された方々から聞いておりました事とは全く違い、夜の町は明るく、戦争で破壊された跡はベルリンで一部見たのみでほとんど見る事が出来ない位それぞれ立派な町になっていました。BASF社のあるルードウィヒスハーフェン並びにライン河をはさんだ対岸マンハイムも約80%は戦争で破壊された由ですが、今はその跡形を見る事も出来ない位でした。なおまた終戦直後は日本と同様非常に住宅難であつた由ですが、どんどん新しい大きな家が建てられ最近はその程でもない様です。また有名

なオートバーン(自動車専用道路)はさすがに素晴らしく、ここを時速100km以上で走る気持は又格別で、田舎に行きましても道がコンクリート、アスファルト、石だたみ等で舗装され、道路標が到る処にはつきりと建てられ、始めて来た人々も道に迷わず運転して行ける様になっており、日本人として大変うらやましく思いました。車も非常に多くその殆んどが国産車ですが、むやみやたらに警笛を鳴らしませんのでホテルにいても非常に静かでこんなに沢山の車が走っているのかと見て驚く位です。

次にBASF社について少し触れて見たいと思います。会社はライン河に沿つて長さ6km、建物の数1,500余、従業員数は3万数千、他建築会社等の人が約1万人近くも働いており、5日制で土、日の2日間は休日です。なお特別な発電所、研究室は交替制で機械は休むことなく働いています。何分大きな会社ですから社内に貨車ありトラックが走るといふ有様で全く普通の町の様です。会社は染料の外、化学薬品、合成繊維、樹脂、農業肥料等を生産していますが、各部門毎の研究室も大きく、莫大な研究費を投じている事は感心せざるをえませんでした。レペ反店で有名なレペ氏はすでに会社を退いておられますがその中央研究所はなかなか見事なものでした。

約1カ月間のスイス滞在の大部分をヘバーライン社のあるワットウイルという小さな町で過ごし、その後をバーゼルのサンドナらびにガイギー社を見学し、最後にチューリッヒ市内を見学しました。

チューリッヒはスイス最大の都市、商工業並びに教育文化の中心をなしており、丘あり、湖あり仲々眺めのよいところでした。街のホテルでもワットウイル同様大変親切で居心地よく気楽に過ごせました。数多くの航空会社の発展と共に日本商品(カメラ、酒、玩具等)も数多く街で見る事が出来また駅前通りのある大きな時計店のショーウィンドウに「日本語を話す店員が居ります」の立札を見た時、こんなところでも故国のにおいにふれる事が出来て、大変懐しく思いました。

スイスにまいりまして一番強く感じました事は、公衆道徳が大変よく守られている事でした。例えば汽車電車は勿論、喫煙出来る車と出来ない車とは、はつきり分れておりまた市電もその様に2輛連結しておりますが、禁煙の車内では絶対に煙草を吸いませんし、劇場映画館内でも決つた場所以外では喫煙してはけません。スイスでは殆んど汽車は電化され、検札は車内であるのみです。ワットウイルはチューリッヒからチューリッヒ湖に沿つて東へ約60km、人口5,000人で近

くにはウインターワッサー等のスキー場があります。ここワットウィルでは朝夕路上で行き合う人は小さな子供でも挨拶をします。特に異人種の私に対しても決して後を振りむいたり、また立止つて物珍らしく見る事のないのには感心しました。おそらく日本人程、人種意識の強い国民はないのではないかと思います。私の場合街を歩いても田舎に行つてもあまりじろじろ見られるという不愉快な事はありませんでした。ここでは一般家庭へも数回訪ねて見ましたが、生活水準は割合に高く、日本の様に貧富の差が甚しくない様です。街は非常に清潔で、家は皆大体揃つており特に小さな貧しい家が見当りません。冬は劇場、食堂は勿論の事、一般家庭は石炭またはオイルで暖房がなされています。スイス人はまた特に花を愛する国民で家のまわりの空地は花植木等を作り、冬でも室内にはどこの家庭でも花が咲いていました。

食事は山国で寒い精ですか一般にドイツより油気のものをとる様です。ドイツも同様正式の食事等は一寸食べきれない程でした。大きな音をたてない様に食事をやる事は慣れない私には始めの内は辛く、勿論仲間が数人でテーブルを囲んでいる場合でも大きな話声笑声をたてる人も余りありません。とにかく日本人に比較して一般に表情が小さい様に感じました。ドイツでは軽くパン食で昼食を済ませているのも見掛けました。

広告類は日本では町の中、汽車の沿線を数多く見掛けますが、これに反して非常に少く、きちんとしております。これは先にのべた自動車の道路標がはつきりと見やすいという事にもなつています。ネオンはドイツハンブルグでは割合賑やかに見られたが、チューリッヒでは非常にその色数が少なく、どの店でも大抵一つの店の名前を出している程度ですから日本の都市に比べてあつきりと、物淋しい位でした。丁度私のまいましたのはクリスマス前で、チューリッヒ駅前の大通りにはただ簡単にクリスマスデコレーション用のネオンが飾られている程度でした。なお百貨店、一般商店等のショーウィンドウはなかなかきれいに飾られていたが、外の飾りつけや宣伝文句等は大変簡単でした。

樹脂加工についてはその考え方が相違する関係でしょうか日本よりはむしろ遅れている様に考えられます(勿論これは合理的進歩をなしていると見るべきかも知れませんが)。綿の捺染技術、特に柄についても売り出されているものから見て決して我が国のものが劣つてゐるとは思いませんでした。ただ綿の仕上げ加工のある面で相当進歩したものがあまた化学繊維の染色加工面では優秀な製品がありました。

スイスには特に消費娯楽が少なく、大抵の工場はドイツ同様土・日は休日です。日曜日の朝は家族全員で近くの教会に行きます。日曜日は店はほとんど締まりただ開いているのは食堂、劇場、映画館、駅の売店位なものです。しかし煙草、ケーキ等の自動販売器は街の各所に見受けられました。スイスの中部にあるマウント・ピラタスに私も登りましたが幾組かの家族づれが来ており、これ等高い山にはケーブルや、空中ケーブルで麓からわずかな時間でほとんどその頂上迄登る事が出来る様になつています。

次に水についてですが非常に硬度が高く日本の様に水を飲んで生活するものには水のまずいのは大変辛い事です。風呂に入つても石鹼の泡立ちが悪く、ハンブルグではその硬度20度もあるのですから一般工場で特に硬度の低い水の必要なもの

にはイオン交換性樹脂等を用い軟化して使用しています。この様に水が悪いため日本で水を飲む代りに彼地ではミネラルウォーター又はビール等を飲むわけです。この点日本は非常に恵まれていると申せましょう。

対日感情に就いては私は、顧客の立場でまわつた関係でよかつたと思いますが、スイスでは工場従業員と雑談を混えて親しく接し、その生活態度や感情をまのあたりに見、聞く事が出来た様に思いますが、非常によいと思います。彼等からしますと日本は夢の国だと言つていましたが、日本の風物はこの上なく美しく考えられておる様です。スイスの湖山の景色は日本と異つた美しさを持つてはいますが私は途中、インド、カラチ等の景色を見て改めて日本には特有の美しさというものがある事に気付きました。なお日本人は非常に勤勉な努力家であると解釈しておる様です。その他日本に就いて彼等は、家族制度、切腹、特攻隊、人口問題というような事にも大変興味を持つていました。

ドイツおよびスイスでなされた質問で第一の事は「何故日本人は奥さんをつれて来ないのか」という事であり、これには全く当惑しました。「経済的に余裕がないからだ」と申しましたら「それでは何故高級カメラ等持つて来れるのか」「スイスも決して富める国ではないが…」とこの様にあくまで「何故」と聞き返すのもドイツ、スイス人の特色かも知れません。すなわち自分が納得ゆくまでは何処までも徹底的に質問し追求しようと努力します。私もこの様に「何故そうするのか」「何故それが必要なのか」という様に尋ねましたがそれらには適確に答えてくれました。

最後に工場内の事です。先ず構構的に見て技術者と一般労働者とはつきり分れており、分業化がはつきりなされているという事です(勿論この事は一長一短があると思います)例えば総合的な質問1つしましても、おそらく日本では1人の人からその概要を掴む事が出来ると思われる事です。彼地では少くも数人の人に当らねばならないわけです。労働者の平均年齢は一般に高い様に思います。また彼等は「この機械を30年扱つている」という事を誇りにしていました。勿論この事はそれ程多くの給料をもらつているという事を誇つているのかも知れませんが。かように欧州人はすべて物事を打算的に考へてゐるのではないかと感ぜられる点も多々ありました。ドイツ及びスイスの従業員は一般に勤勉で、陰日向なく、よく働き、監督者をあまり必要とせず、工場内外及び機械の整備整頓がよく行き届いていました。なお工場内の流れは適切な指示にもとずき、忠実な作業によつて着実になされているという事です。工場の保温換気の点についても相当立派な設備がなされ、災害について見ても安全装置はなかなか行き届いており、事実災害が少いのです。欧州の機械メーカーを見学した時は確かに新しい優秀なものが多い様に思いました。実際加工工場には残念ながら機械メーカーで見た程優秀な機械設備があるわけではなく、この事は全般の染色加工工場についても同様です。ただし日本と外観は何ら変りのないものでもその材質、工作精度、附属部品等の点においては確かに勝つている点が多く、また機械を非常に上手に用いているのには感心させられました。

母校を去るに及んで

蒲生 俊 興

青年は希望に生き、老年は記憶に生くというのが、私が明治44年4月17日(1911年)上田蚕糸専門学校の第1回生として入学してから早くも47年の星霜は矢の如く馳せ去つてしまいました。大正3年養蚕科の第一期生として制服を脱ぎ棄てて農林省の蚕糸試験場助手を拝命して見たが、感ずる所あつて東京帝国大学理科(植物)に入学し、再び学生生活を送つたが家事都合で中途退学し、大正6年から同8年まで栃木県蚕業試験場に勤務しその後再び大正12年まで農林省蚕糸試験場技官として研究生生活を送りました。当時長野県蚕業試験場が創立されるや母校教授松村季美氏が抜擢されて長野県技師として転出の後を受けて私が母校へ採用されたのが大正12年関東大震災の春でありました。



それから今日まで35年の長い間母校教官の末席を汚し、その間幾多の迂余曲折は免れなかつたが、大体大過なく過すことが出来たことは、針塚先生、井上先生ならびに伊藤先生を初めとし歴代の学校長及び学内先輩諸先生や同僚各位の一方ならぬ御庇護の賜であり、ひたすら感佩措く能わざる所であります。

今回信州大学教官の停年制に従い来る3月末日をもつて35有年にわたる永い教壇生活を離れることになり、誠に感慨無量なるものがございませう。その間はなほだ不敏かつ微力なる者ではありましたが、養蚕学を担当した関係から北は青森から鹿児島に至るまでほとんど全国に足跡をたどる所なく母校を代表して講演行脚を致したり、あるいは同窓の長兄として社団法人千曲会の創立に努力し、初代の千曲会理事長を相務めまた日本蚕糸学会のご推薦によつて昭和24年から3期間(満8年間)日本学術会議会員として中央学術の府に参画し、新設新制大学の拡充強化に就て努力奮闘致しました。又終戦後は社会道徳の頹廃を憂慮のあまり私が中心となつてMRA運動(道徳復興運動)を招致して職員および学生に働きかけたことは思い出の種となりました。

これよりさき昭和3年母校唯一の学術発表の機関誌であつた蚕糸学雑誌の発刊を企画し、日本蚕糸学雑誌より一年先んじてこれを刊行し、母校の科学的水準の向上発展に微力を尽してまいりましたが、太平洋戦争の勃発に伴い、昭和16年における第12巻を最終巻として一応廃刊となつたことは蚕糸学界のために誠に痛嘆にたえません。

私が大正12年に母校助教として着任して養蚕学と蚕体解剖生理学を担当致しましてから養蚕科11回生を最上級として養蚕科製糸科及び繊維農業科学生約2,000名の教育を申し上げ、その内有力会社の重役や工場長、府県の課長・場長・技術官・大学教授・学校長・市町村長及び議員等々多数の成功者を輩出することが出来たことは教育者として無上の光栄であり、感激措く能わざる所であります。

この長い35年の間を顧みれば、3たび日本学術会議会員に立候補した都度又アメリカ渡航の際にも、同窓諸兄は勿論、長野県や実業界からの莫大なるご援助をたまわり、ひたすら

感泣致しておる所でございます。

かくのごとく長い長い専門学校教授や信大教授在官中は現職を笠に着ていわば虎の威をかる狐のように、世の中は私を買いかぶつて実力以上の存在として尊敬をうけて参りましたことと恐察し、唯々感謝申上げておる次第であります。が、今回一度現職を退いて素浪人と相成りました上は、今度こそ真正々銘の自力一本の人生を送らねばならぬことであり、新卒業生が恩師や父兄の慈悲深き膝元から社会の荒浪に押出された当時と同じ感懐を抱いて身の引縮まる思いをいたしております。

47年という永い間蚕という1種類の動物に研究範囲が制扼せられ、窮屈な狭くしい人生を送つて来た自分も、今度こそはやつと広々とした世界に自由に棹さして、今までの僅かばかりの蘊蓄や経験をたよりに、思う存分に背のびと欠伸をして再出発を志したいと考えております。「希望は強い勇氣となり、新たな意志をうむ」とルッターは教えてくれました。「希望は人生を成功に導く信仰である」とヘレン・ケラーは述べていられます。「患難は忍耐を生み、忍耐は練達を生み、練達は希望を生む」とパウロは教えてくれました。独り青年ならずとも雄大なる希望に生きて、晩年の事業に専念致したいと意気込んでおります。何卒在官当時以上に倍旧の御眷顧と御引立を仰ぎ度いものと慇懃いたす次第であります。

母校を去るに及んで日頃私の脳裡に往来していた夢を少しばかり記して志を同じうする方々の御尽力を願いたいものと存じます。

- (1) 母校教官の研究施設の拡充と学生の実験室および設備の完備を望む。すなわちやがて大学院設置の準備を進めること。
- (2) 教官各位は一層学術研究に没頭せられ、ことに象牙の塔を脱出して、産業界とマッチした最新の研究テーマに進まれ、その貴い学園の雰囲気をもつて学生的好学的精神を育み、せしめること。
- (3) 研究成果展示室を設置して貰いたい。これが同学者の研究に便し、実業界や社会教育に役立ち、また学生の研究心を助長する。
- (4) 図書館の完備と文献渉猟に便し、教官および学生の読書習慣を涵養する。
- (5) 1日も早く放射線応用の繊維科学に関する附属研究所ならびに大学院設置の方向に努力せられたい。
- (6) 各科のセクショナルリズムを減し、全学園を1団として大学の向上発展に努力せられたい。
- (7) 学術会議の研究体制委員会の提案に従えば、やがて新設新制大学の再検討の時期は近きにあり、無理な章魚の脚大学は分離、統合のテストケースとなる可能性が多いと思われる。この際母学を益々充実して海路の日和と単科大学への夢を実現して貰いたい。
- (8) 学校、工場及び財団法人学術振興会等を合理的に運営し

退 官 に 際 し て

倉 沢 美 徳

停年制によりまして私はこの3月末をもって退官することになりました。私がお世話になりましたのは当学部の前身蚕糸専門学校時代で昭和3年3月でありましたから丁度満30年間在職したわけです。さて改めて「退官に際して」等と書き出しますと30世相回顧の絵巻物が走馬燈のごとくに現われては消えて万感まことに尽きせぬものがあります。これらのうちで特に忘れることの



出来ない事は繊維農業科の誕生と、間もなきその終熄の一事であります。戦争がいよいよ熾烈になると吾が校も時の社会情勢に余儀なくされて校名を繊維専門学校に変え養蚕、製糸両科を圧縮して繊維農業科を設立しました。建物、教材、物資、教授陣営等求めても得られない秋でありましたから設立の衝にあつた佐藤(春)先生を始めとして吾々の労苦も並大抵のものでありましたが学生諸君の困苦欠乏も筆舌に尽し難きものがありました。それでも徐々ではありましたが着々整備を進めて参りました所、戦争の終熄と共に廃科となり五回の卒業生だけで後続部隊を絶たれて了いました。

教師、学生共渾然一体となつて血涙で綴り合せた織農同窓生も目下の同窓会内における地位としては、やや宙に浮いた感がないでもありません。もともと織農は戦争の落し子とい

う感も致すのでありますが、この一群の人達は何か一抹の淋しみを負っている事と存じます。校名の変更を提称し、織農の設立を主張し、陣頭に立つてこれを造り上げた一員として、如何に時勢とはいへこの科の存続が出来なかつた事について今もなお責任を痛感している次第であります。当時の主力佐藤先生はご退職になり、齊藤先生はご病氣静養中、川

端、吉田両先生は転任なされ、今はただ町田先生1人在職せらるるだけとなりました。この責任に対し同先生の御健闘を祈つてやみません。これが思い出の内最大の関心事です。

さて、私は御承知の通り不徳非才の人間でありながらかくのごとく長年月在職することが出来ましたのも畢竟同窓生各位のご支援の賜物でありまして、ただ感激の外はありません。退官に当り謹んでご厚情を感謝致し皆様様の御発展と御多幸を御祈り致す次第であります。

私は退職後は自宅において、農業に従事致しますから、当地ご来遊の節はお立寄り下さらばまことに幸甚の至りでありまして新々の社会事情などおききすることが唯一の楽しみとお待ち致す次第であります。

て母学の学術研究助成の功を挙げて貰いたい。

- (9) 学生ホール、体育館等を新築して学生の厚生施設を充実せられたい。
- (10) 教官の宿舍を新築して、優秀なる教官に安住の地を与え研究と教授に余念なからしめることを望む。
- (11) 開校以来の老朽建築物を処分して一日も早く鉄筋コンクリート五階建の本建築を熱望する。
- (12) 各科特に業界不振である蚕糸業に関する学科名を適当に改善して、魅力的な科名を考えては如何(例えば養蚕学科を蚕糸農学科、製糸学科を蚕糸工学科)
- (13) 一度入学させた学生に対しては飽くまで、その専門学に興味を覚えて邁進せしめる様教導し、就職の斡旋、公務員試験並びに採用試験などに対しては全員を挙げて御尽力を願いたい。
- (14) 若い優秀なる教職員が組合運動の様な雑務に貴重な時間を占領せられないようにして頂きたい。
- (15) 一日も早く教官の定員を増し、不完全講座を解消して貰

いたい。出来れば英・独・仏の外国人教師を採用して貰いたい。

- (16) 大学と千曲会とが協力して「繊維学研究」(仮名)という学術雑誌の復興を願いたい。
- (17) 教官の海外留学の機会を多くしたい。

以上は私が在職中に追々これが貫徹を期し度いと念願していた夢を思いついたまま、書き記したまでであるが、志を同じうする職員並びに同窓各位の一層の御尽瘁と御奮起とを願つてやみません。退官するに当つての私の感懐は誠に日暮れて途なお遠しと申上げる外はありませんが漢籍晋書に「文夫蓋棺事方定」とあるのを思い出し、向後益々信仰生活に進んで悔いを貽さぬように努めたいと念願しております。どうも色々とお世話様になりました。退職に当り職員並に同窓各位に対しひたすら深甚なる感謝の意を表すると共に今後ともよろしく御眷顧と御交誼とを御願い申し上げます。(1958年3月17日)

倉 沢 先 生 の 印 象

町 田 博

恋しい人、親しい人との別れは実に淋しいことである。20年もの長い間、親のように慕い、また子のように培い苦しみも楽しみも、喜びも悲しみも共にして導いて下さった倉沢先生が停年で御退官されるに際し実に寂寥胸につまるものがある。

私が先生を知ったのは入学の年である。当時先生は昆虫学と桑園実習を担当され、農場建物に実験室を持たれ（現在私がその室にいる）園場主任として桑園の運営をもやつておられた。私は生来動物より植物を、虫より花を好きだったので、学生時代もお蚕より桑に興味があり、加えて先生のおおらかな情愛豊かな風格にひかれて桑園実習を楽しくやつた。当時から先生の頭髪は薄かつたがお若く、学生とよく遊びよく語り、学生にとけこんで教育してやるというフアイトをもつておられ、そして内にきびしいところもあつたが大きな愛情が溢れておつたので、学生から1面にはこわがられ1面には非常に親しまれ「農場のおやじ」と通称されていた。

先生は30有余年の年月をいわば生涯の大半を学校と共に生きてこられた。今までにこのような長い年月この学校に勤め、それぞれの立場で学校の発展に尽し、立派な業績を残された教育は10数名を越えるであろうが、真に学校を愛し自己の業績を顧慮せず、ひたすらに学校の将来と学生の訓育補導及び卒業生の進路について精魂を傾注された先生は他にないであろう。かつての専門学校にしても、まして大学ではその専門とする学間に研さんを重ね立派な研究業績を累積することが教官の本命であるならば、あるいは先生はその本命から少し離れた道をとつたことになるかもしれない。先生が全精力を傾倒されたのは「学問以前」の人間教育であり、卒業生の職場の開拓とその後の社会的安定の世話であり、更には校内の秩序ある平和と時代の進展に伴う学校の改革振興とに対する絶大な尽力であつた。これらの面に残された先生の足跡はさきの本命に即して積まれた有形の研究業績に劣らない偉大な功績であると信ずるのである。学問の殿堂といわれる大学であつても、現在多くの大学は研究面と同様に先生が献身的に尽力されたような局面が益々実質的な重要性を増して来ている時、先生の功績は改めて見直されねばならないであろう。そしてその様な業績も研究業績と同等に物心両面において顕彰されて然るべきだと思う。

先生の御専門は応用昆虫であり、就中天柞蚕であつたろう。天柞蚕の御研究は先生の独壇場であつて、戦前満州における柞蚕業の発展には先生の研究業績があずかつて力になっている。先生は同地に2回視察、指導に行かれた。その関係で満州には100余名の卒業生が官界、業界に活躍した地盤が築かれたのである。

先生は先見の明がおりになり、将来の成り行きを見透されてそれに処すべき策を考えられる才に富んでおられ平素敬服していた。戦争の末期に蚕糸専門学校から繊維専門学校に変わったそもそもの糸口は学校振興に関する先生の創意にあつたのである。即ちお蚕関係だけでは養蚕科の卒業生の活動範囲は狭い、

繊維全般の原料生産場面に進出することを考え、他の天然繊維に関する学科目として繊維植物論、繊維動物論をとり入れ、更にこれらの専攻コースを制度化したということでも中央に働きかけたところ、たまたま共栄閣繊維資源開発技術者養成が国策に上がり、結局繊維農業科の増設となり、工専の紡織科を本校の紡織科に吸収し、本校は繊維専門学校に発展したのである。

又学制改革で大学に昇格の頃、学校の内外は一貫して単科大学の昇格に熱烈執拗な運動を展開していたが、当時庶務課長を兼務していた先生は中央の情勢あるいは国情を透察されて、その運動には批判的であつた。果して結果は先生の見通し通りになつた。当時単科の繊維大学昇格に当つての学科構成については、従来の5科それぞれの伝統は尊いが科名に執着せずに、繊維農学科、繊維工学科、繊維化学科の3科構成で内容も更新して全く新たな構想で再出発することを先生と共に主張したが、票決で敗れて現在の4科編成になつた。10年を経た今日、学部振興の線で検討されている学部将来の在り方の形勢が当時の構想に近づいているときいて苦笑されることであろう。

先生は時代感覚が進歩的であり、また実にお若い気持でおられた。それは先生の日常にたえず感じられた。ために私どもは時には同僚のような錯覚におちいることがしばしばあつて、先生に無礼な振舞や言葉使いをしたこと数しれず今もつて慚愧に耐えない次第である。しかし先生は抱擁力が大きく、そんなことには実に淡白であり、しかも少しも気どるところがないので、益々親しみを覚えることは私ばかりでなく、校内の若い者や卒業生の多くが誰しも感じているところであろう。先生もまたお考えや思つたことを率直にあるいは露骨にいわれた。会議などで意見を述べられるときは案外控え目であるが、教え子に対してはその人間のためであると思えばきびしくとすふうであつた。先生は「おれ程口の悪いものはないぞ」といつておられたが、いわゆる人の悪口は1度もいわれたことはなく、すべて親切心と愛情からほとぼしる教訓的なお言葉であつた。このご心情に加えて世話好きのご性格の人の窮状を救うフアイトをもつておられた先生は専門学校時代の長い間、全くご家庭のことは顧みず、ご研究の方もある程度犠牲にして養蚕科卒業生の世話をほとんど1人でやり抜かれたのである。就職開拓のために足を棒にして歩き廻つた苦難時代のお話をきいたこともある。そのご苦心が卒業生に映らない筈はない。先生が恩師として最も多くの卒業生から敬慕されるゆえんがそこにもあると思う。

世の中には目立たないが、重要なしかも苦勞な仕事がある。先生はそのような仕事を進んでおやりになり、蔭の力になるが、地位的な表面に立つことは好まれなかつた。わが農場は養蚕学科にとつて重要な地位を占める学部附属機関であるが、これを先生は専門学校当時桑園として立派に育て、更に繊維農業科新設と同時に校外に大室総合経営農場を増設して、現在の附属農場として官制化されるまでに築いたのは先

蒲生俊興教授の御勇退

山口 定次郎

母校教授蒲生俊興博士は去る3月31日をもって退官された。先生は上田の卒業生のシンボルといわれて来たが、蚕糸専門学校ご赴任以来、信州大学繊維学部の今日にいたるまで満35年の長年月を一貫して母校教授として専門学科の教育並びに学生の訓育に精魂を捧げ尽されて来たが、この度、信州大学の停年制——満65才——の適用をうけられ、別記事倉沢美德教授と共にいさぎよくご勇退されることになった。大学や千曲会はもとより、学会、業会の多くの人々からは「まことに勿体ないことである」とひとしく惜しまれている。

先生が上田へ赴任されたのは大正12年春4月で私達の2年生の時である。今日からみて、蚕糸業の黄金時代であつたが齡正に31、2才で少壮瀟灑満面実に清新の風が溢れていたことを覚えている。恰度時の校長針塚先生の時お招きにしたがい母校松村季美助教授が長野県蚕業試験場へ榮転されたのでその後をうけて助教授として就任されたのである。

先生は大正3年最優秀の成績で上田蚕専第1回の卒業生として門出され、しばらく蚕糸試験場に勤務されたが先生の向学心は燃えるごとくで更に東大理学部を選科に入学勉学された。しかし家庭の都合もあつて惜しくもここをやめ再び蚕糸試験場に帰り綾部支場で研究生活に入った。そして7・8年の後母校の助教授として迎えられるまでもなく、昭和2年教授に榮進されたわけである。

爾來専門学校及び大学の教授として、主として養蚕学及び蚕体解剖生理学等の講義と同実習、実験等を担当され、又更に学生教養訓育方面については、格別に心を懸け、熱意と誠実をもつて説かれ数多くの卒業生に幾多の感銘を残してきたことと思われる。又学内では早くから幹部として校長や学部長をたすけ、あるいは学科の長となり主任となり最近信州大学最高の審議に与るべき信大評議員として参与し常に1学部のみならず、少くとも信大全体のために更には特に新制大学の在り方などについて、常に忌憚ない意見を開陳して学校の運営発展、刷新に努力された。

学術研究方面としては、蚕の生理、特に「蚕の血組織の発生並びに機能に関する研究」を完成し昭和11年農学博士の学位をえられた。以後脂肪細胞に関する研究、蚕の呼吸生理、血液の研究をはじめ戦争中の混乱期と雖も家蚕の発育とビタミンCとの関係につきすなわち栄養問題に関して深く研究を進められ、昭和26年には「家蚕の栄養生理に関する研究」と

生の行政的なご手腕と絶大なご努力によるものである。官制の後には文部大臣の任命する農場長を他の先生に譲つてお引受けにならなかつたがご在職の最後にお受けになり、農場運営上の重要課題2・3を解決し「農場のおやじ」として有終の美を飾つて頂けたことは喜ばしい限りであつた。

先生のお好きな趣味はテニスと囲碁であり、酒はお飲みにならないことは誰もよく知つていよう。近年はご健康が優れなかつたので専ら囲碁を楽しんでおられた。これからは悠々自適、花作りや囲碁を楽しまれることが健康上望ましいと申し上げた次第である。先生の御健康を祈つて筆をおく。

してその業績が学会において高く評価され、日本蚕糸学会賞を授与された。最近ではアイソトープ利用により蚕の代謝生理その他の研究に打込まれ愈々少壮学徒をしのぐ精力ぶりを發揮されていた。

なお先生はこのように理学的の研究に終始することなく常に応用面と結びつけられ、これをもつて学会を指導すると共に、業会を積極的に説得し指導する力をもつていた。すなわち先生の「能筆」と「雄弁」の力の結果である。研究報告は原著のみでも100篇に余り、通俗雑誌への執筆は無数である。又講演講話の回数も数限りなくおそらく先生の足跡のいたらぬ府県は皆無であらうと信ずる。

蒲生先生はまた日本学術会議会員の選挙に当り第1回より第3回連続全国区から出馬し見事に高位で當選し、第3期の終りまで満8年間日本学術の振興に関し極めて真面目な熱誠溢れる政治性を發揮され、特に新制大学の改革、学術体制の刷新について異常な努力を払われた。第4期はいさぎよく勇退されて林教授にバトンが渡されたが蒲生先生の努力が最近重要視され検討されつつあるという。

先生は昭和26年10月、農業教育、昆虫生理学及び組業視察を目的とし、恰もMRA(道徳精神昂揚運動)の招聘もあり約4か月に亘り渡米され極めて多くの成果を取つて帰国された。

蒲生先生は母校入学以来約50年に亘り常に同窓生の長兄であるとの自覚強く母校および千曲会のことについては、先生より4、5年おそく赴任された倉沢教授(蚕2)と共に、常に自己と家庭を犠牲にしてもという驚くべき熱意をもつて尽されて来た。先生は赴任以来14、5年間理事長として長くその運営の重責を負い続けられ就職問題や母校および会の発展のために幾多の功績を残された。母校25周年記念事業としての千曲会報、針塚先生の銅像の設立、大学昇格の際の新館の設立等、林、倉沢、野口諸教授と共に、あるいは理事長としあるいは顧問として尽された事蹟は無数であらう。

以上は大学教授、学者、学会指導者、政治家、業界指導者としてまた千曲会の長老としてなど表面に現われた蒲生先生の履歴や業績の片鱗を記したに過ぎぬかもしれぬが、ひるがえつて今日までの上田の美しい歴史や伝統をおもむるに眺める時、偏に針塚精神を継承された長兄の蒲生先生の力によつて作られたというも言いすぎではないと信ずる。今更のように惜しみても猶あまりある立派な偉大な先生であつた。茲に長年御世話になつた先生をお送りするに当り満腔の敬意と感謝を捧げ、先生の前途愈々御多祥ならんことを祈つてやまない。

会費を納めましょう

会報受領の日と俸給日には、現金を封筒にほうりこんで気軽にお送り下さい。

大学第6回卒業生 卒業論文抄録

モンシロチョウの鱗片の発生に関する研究

養蚕学科 八木研究室 滝 沢 達 夫

モンシロチョウの鱗片形成過程を組織形態学的に究明するのを目的とした。得られた結果を5つの特徴期に区分して要約すれば次のようである。

I 細胞分離期 化蛹直後から化蛹後18時間ぐらいまでの時期を指す。即ちこの間において、化蛹前まで融合していた真皮細胞が漸次その境界を明らかにする。

II 第1分裂期 化蛹後約18時間から24時間にかけての時期で、真皮細胞が第1回目の分裂を起し、鱗片形成母細胞と痕跡細胞(後に退化する)に分かれる時期である。

III 第II分裂期 化蛹後約24時間から28時間の間に起る第II回目の細胞分裂期にあたる。第I分裂にひきつづいて鱗片形成母細胞は分裂を起し、形成細胞と鱗片細胞とに分かれる。鱗片細胞は細長で、真皮細胞層の上に突出してみえるのが特徴である。

IV 鱗片伸長期 この時期は化蛹後約36時間から羽化前(約168時間経過)にかけての鱗片がもつとも伸長する時期である。

V 鱗片完成期 鱗片は完全に形態を整える羽化直前(化蛹後約170—180時間)の時期を指す。この時期にいたれば斑紋が着色し、まもなく羽化にいたる。

2,5-Diketopiperazin-3,6-diacetyl diamide の合成とそのポリアמידについて

繊維化学科 大平研究室 乾 康 利

アスパラギンおよびフマル酸から2,5-diketopiperazin-3,6-diacetyl amide を合成し、この diketopiperazin の両末端のアמיד結合を加水分解して遊離の二塩基性酸となし、他の diamine と重合させて diketopiperazin 環の入ったポリアמידを合成しようとした。

2,5-diketopiperazin-3,6-diacetyl-diamide の合成はアスパラギンを原料とする Fisher, Königs の方法とフマル酸から出発する Dunn, Fox の方法の2法により合成した。

Fisher の方法によつた場合は試料アスパラギンに対して理論値の約6%の収量で得られ、Dun, Fox の方法により行つた場合はフマル酸に対し約22%の収量であつた。

この2法により合成した diketopiperazin の両末端アמיד結合を加水分解する目的で稀酸を作用せしめたが、末端アמיד結合のみに作用し、diketopiperazin 環に作用しない様な反応条件は見出し得ず、目的とした diketopiperazin 環の入つたポリアמידは残念ながら合成し得なかつた。

セリシン凝固に関する研究

製糸学科 高木研究室 安 藤 長 生

繰糸湯中よりセリシンの析出する現象は自動繰糸では特に問題である。この現象の因子としては色々考えられるが水質如何は特に大きな因子と考えられる。セリシン溶液を作製しこれに種々の塩類溶液を加えるとあるものは凝固し(CuSO₄等)あるものは変化しない。

塩類とセリシンとの作用を検討する手段として簡単な表面粘性の測定装置を作製し、2, 3の実験を試みた。

セリシン溶液を放置すると3時間経過頃より急激に表面粘性が増大するのが見られた。

セリシン溶液にNa₂CO₃を加えると表面粘性はほとんど増大しない。NaNO₃もわずかでであるが同様の傾向が見られる。(NH₄)₂SO₄は表面粘性の増大を促進する。FeCl₃及びCuSO₄は微量でも表面粘性を極端に増大する。その作用はFeCl₃において特に著しい。

これらの結果から水質がセリシン溶液のゲル化あるいはセリシンの析出に及ぼす影響などを検討する1手段として表面粘性の測定は都合のよいものと考えられる。

生糸に対する界面活性剤及び尿素の作用

製糸学科 高木研究室 大 久 保 義 彦

製糸の各工程とかソーキングの際、界面活性剤や尿素が生糸あるいはセリシンに対し根本的に如何なる作用をするか知ることには意義のあることと考えられる。

カチオン活性剤自身は吸湿性の大きい薬剤であるが、カチオン処理生糸は含有水分が無処理生糸より少くなる。尿素処理生糸も同様である。非イオン、アニオン活性剤処理生糸はこのようことはない。生糸の繊度の差による吸着量の差をみるとカチオンと尿素は差が少い。非イオンとアニオンは繊度が小さいと吸着量が多い。

各薬剤で煮繭繰糸した際の解舒抵抗を比較すると対称区に比しカチオンは極めて大で非イオンも幾分大きい。尿素とアニオンは小である。

軽い精練を行つた際のセリシンの溶解割合をみると、無処理生糸に比較してカチオン処理生糸は溶けにくく、アニオン処理生糸は溶け易く、非イオン及び尿素処理生糸はあまり変りがない。またセリシン粉末をつくり、これを上記各薬剤で処理したもののX線廻折像には差が見られなかつた。

以上の各実験よりカチオン、尿素は生糸の表面のみならず内部のセリシンにも作用するがその作用は根本的に異り、カチオンは静電氣的結合、尿素はペプタイド主鎖への水素結合ではなからうかと考えられる。

桑芽枯病に関する研究

——松尾卓見氏学位論文の紹介——

前号でお知らせしたように母校養蚕学科の松尾助教授(蚕28回)は京都大学農学部から農学博士の学位をうけられた。次に氏の論文の概要を紹介する。なお、桑芽枯病はわが国において胴枯病と並び称せられる桑条の重要病害であり、各地で年々軽視できない損害を及ぼしている。

論文「桑芽枯病に関する研究」はI~III編、163頁からなり、第I編にはその病原学的研究すなわち病原菌の諸性質とその分類学的考察が述べられている。本病は完全時代(有性時代)として *Gibberella* 属をもつ *Fusarium* 菌によるもので、その学名には従来 WOLLENWEBER, REINKING 両氏の分類体系によつて *Gibberella baccata*(WR.)SACC. v. *moricola* (D. NTRS.)WR. [*Fusarium lateritium*] NEES v. *Mori* DESM.]があてられていた。しかし松尾氏は各地から採集分類した本病原菌の数十系統についてくわしく検討された結果、それら系統間に幅の広い多様性があることを明らかにし、従来行われていたような変動し易い基準に立脚した WOLLENWEBER らの分離法ではこれを明確に分類することはとうてい不可能なことを指摘された。そしてこれと代るものとして SNYDER, HANSEN 氏らの分類体系に一部修正を加えて採用し、本病原菌に対して *Gibberella lateritium* (NEES) SNYDER et HANSEN [*Fusarium lateritium* (NEES) SNYDER et HANSEN]なる明確な学名を確立された。*Fusarium* 菌には農業上重要な病原菌が多く含まれているが、その“種”はいずれも端倪すべからざる多様性を内包し、その分類が面倒なことは病理学者の間で定評あるところである。氏が世界で次第にその真価を認められつつあつた



SNYDER HANSEN 氏らの明快な *Fusarium* 菌の分類体系を、いち早くわが国の *Fusarium* 菌の分類に実地にとり入れ紹介するとともにその1部を補足修正された功績は多ししなければならない。

第II編、病原菌の生理学的研究では主要な環境要因との関連における本菌の生理的諸性質を明らかにし、第III編への基礎を固められた。

第III編の病理学的研究では本病の伝染源形成の様相、病原菌の桑条侵入、疾病の進展の機構や、それらと時季、桑品種、肥料などとの関係を解明された。これらの内容は本病防除の基礎として重要な意義をもっているが、その中で本病の発生進展の時季的起伏を氏が考案された附傷接種法によつて実験的に明らかにし、その起伏を裏付けしている桑条の側の抵抗機能——とくに傷部木栓組織形成の病理学的意義をはつきりさせたことは、たんに桑の枝枯性疾(芽枯病、胴枯病、その他)についてだけでなく、ひろく果樹その他の木本の類似疾病の発生機構ならびに発病相の解明にも貢献するところが大きいものと思われる。

要するに以上の研究は、桑芽枯病菌を通してわが国の *Fusarium* 菌の分類に新機軸を開いたばかりでなく、青木博士の桑胴枯病発生機構の解明につづいて桑樹病害研究の歴史を病原探索の段階から発生機構解明の段階へいちじるしく前進させ、本病の科学的な総合防除法確立への基礎を固められた点で大きな寄与をなしたものと見えよう。

(桜井記)

保・小川兄を悼む

静岡 戸倉 八峰

去る2月18日飛電は小川大人の逝去を報じて来た。

同君は終戦後長らく軽い中風で起きたり、臥たりの状態であつたことを洩れ聞いていたが、今は既に無し。嗚然たり。

最近で同家に同氏を訪れたのは栗林悦兄夫妻であつたらう。それ程、心の親友小川・栗林コンビは本学以来続いた証左と言えらう。小川兄帰郷後最初に同兄を訪れたのもまた栗林兄であつたらう——それは大正7年秋この追悼文を書いている筆者の八峰愚人と同道の往訪で出迎いに来てくれた故人と府中の料亭「恋しき」で青年3人は久潤を謝しつつ

美形をはべらして1夜1杯飲んで楽しみ、翌日小川家を訪れた次第であつた。あれから40年の彼の生涯は恋もあり、笑話もあり、又波もあつたらう。波乱の40年、一太く長く過した小川歴史は人生として先ず先ず幸福だつたと言ひ得るともいえる。ただ家庭的には兄弟、子女に早死された方々が一寸多かつたのは1つの悲運だつたのかも知れぬ。

筆者八峰山人もまた40余年親交を重ねた1人で言うなれば水魚の交りともいひ得る仲であつたので一入今昔の感に耐えぬ。そうした交りを得たのは宿命の種屋の子という業界を同じうしたため、常

に知恵を借りたり、互いに蚕種業の見透しなど意見を戦わしたためであつた。

小川兄は性格無邪気で親切心深く万人に可愛がられた。在学時代学科、実験に熱心で頭脳明哲、常に首席を占めて卒業生のホープであつた事は勿論で、思い付いた事はそのままズバリ放言する1放言居士、実験時、金魚が1匹死んだのを、「先生金魚が1匹死にました」と報告したので口の悪い八峰山人はアダ名を「金魚」と付けてやつて、御本人も唯々諾々終生のニック・ネームにした逸話もある。保・小川一いや金魚も気永に天国を遊いで永久に生きていてくれ給え。

SAIION

合成繊維ノイローゼ

(糸22) 尾沢敏男

またしても今日の朝刊に1頁大にわたる三菱レイヨンのアクリル系繊維「ボンネル」のセンセーショナルな広告があらわれた。昨年は東レと帝人が莫大な賞金を出して大がかりな方法で国産テリレンの商品名を一般から募集し、「テトロン」という名称がきまつたし、今年になつてからは東洋紡と住友化学がタイアップしてつくつた会社のアクリル系繊維「エクストラン」の広告が週刊誌その他にあらわれ出した。またつい先頃は大阪の高島屋に盛大な東レ「テトロン」の展示会があり、それから半月もたたない中に大阪の紳業クラブで帝人「テトロン」の展示会が華やかに開催され、招待者には1部200円位はかかりそうなパンフレットと帝人「テトロン」のネクタイとミシン糸が贈呈された。文字通り合成繊維時代が展開されている。ただでさえ合成繊維ノイローゼにかかっている我々は、益々心の平静を失つてくる。ここにいう我々というのは、従来の天然繊維を取扱っている人達、合成繊維メーカーおよびこれから合成繊維をつくらうと考えている人達をすべて含めてである。つまり天然繊維を取扱っている人達は今後天然繊維が合成繊維によつて浸蝕されることをおそれるノイローゼであり、すでに合成繊維をつくっている人達は今後どんな優秀な新しい合成繊維があらわれるかもしれないことをおそれ、かつはげしい競争に打勝つてゆけるかどうかを心配するノイローゼであり、またまだ合成繊維生産に着手していない人達はいわゆる「合繊バス」に乗遅れることをおそれるノイローゼである。このように我々を不安と焦燥にかりたてている合成繊維の本質は一体何であるか。しばらく合成繊維出現の必然性というようなことについて考えてみたい。各種の天然繊維はそれぞれ立派な長所をもつていて過去何千年かの間人間の衣生活を満足させてくれている。しかし人間の文化が進み、より高度の性能を繊維に要求するようになってくると、従来の天然繊維ではそれらの欲求を満足するこ

とができなくなり、この欲求にこたえて合成繊維が出現したわけである。従つて合成繊維は決して天然繊維の代用品ではない。

それならば衣料に対する人間のより高度の欲求というのは何であろうか。これを大きづばに考えてみると、(1)強いこと、(2)美しいこと、(3)取扱いが楽であることで言いあらわせると思う。(1)と(2)は当然のことであるが、(3)の取扱いが楽であることは Easy Care, Ease of Care あるいは Minimum Care というような言葉で表現され、現代人つまり無精物には重大な関心事となつてきている。Easy Care の内容を具体的にみると、皺がよらない、特に濡れても皺になりにくい、洗濯により寸法や風合が変らない (Dimensional Stability) があり、Wash and Wear)、ヒダがいつまでも残る (Thermoplastic である) という風なことになる。そして上記のいずれの性質も合成繊維によつてほぼ完全に満たされている。現代人が飛びつくのは当然であろう。私は極めて保守的で必ずしも新しいものを好まないが、濡れても座つてもズボンの筋がいつまでもちやんとしていて皺にならないこと1つだけでも私には大きな魅力である。つまり合成繊維は現代人の要望にこたえて現われるべくしてあらわれたものといえる。

今後合成繊維が大幅に天然繊維を浸蝕することは間違いないが、合成繊維といえどもオールマイティではない。たとえば疎水性で汗を吸わぬので肌触りが悪いとか、ドリリング(ももけ)を起しやすいというような問題もある。当分は主として天然繊維との混紡、交織で進むものと考えられる。

ところで以上は合成繊維の性質の面のみからの考察であるが、現実最近の繊維不況や国内における合成繊維ラッシュなどの悪条件を併せ考えると、ここ数年間のわが国合成繊維事情たるや甚だ複雑微妙である。いずれは揃つてあるいは誰かが落伍して安全な目的地に到着するであろうが、現在すでに合成繊維バスに乗込んでいる人達のノイローゼが一番深刻ではないかというような気がする。

おしやれの意味

安田勝彦

しやれ=気のきいた様、なまいき、滑稽と辞書に出ている。僕は中学生の頃友人達から「なまいきだ。」といわれていた。それはおしやれだつたからだと彼等は今になつていつている。別に辞書の意味を知っていたからでもあるまい。それはただ僕の気のきいた様に嫉妬を感じてのことであつたらしい。でも僕は現在、当時を思い出しては一人て恥ずかしがつている。何故ならニキビを顔一面に映かせてベスト・ドレッサーでもあるまいにと思いを至すからだ。

永かつた冬もようやくに終り、桜の春が近づくと、街行く女性の服装も随分と軽くなり、色も明るく変つてゆく。僕はこの頃になると愉しみが一つ増すのです。薄いセーターを透し青春のいぶきを存分に吸いこんだウクラミや細くしなやかなウエストが婉然と僕にほほえみかけるからだ。

ここまで書いて来た時、百貨店の女性下着売場が思い浮んで来た。特にスポンジのふつくらとした、男性の目をゴマカス、いや、楽しませてくれる、更には性感に訴えることを随分に意図したアノ「イミテーション」がたくさん並んでいたことを……。

女性の中にはアノアレを本物の上に被せて男性にアピールしようとする、健気なそしてあくらつなお方もいらつしやるようです。

どうです皆様、おしやれも化粧品と同じで、化かすことを目的としていますが、これを着る者は化かされていることを知りつつも、またそれを愉しんでいるのではありませんか。

やはり、おしやれはきのきいたものでもあり滑稽なものでもあります。

(紡織科4年)

松村博士逝く

本会顧問・農林省蚕糸試験場松村季美博士(蚕1)は病氣療養中のところ、去る4月7日午前4時逝去された。ここに謹んで哀悼の意を表する。

思い出の寄生木 (3)

静岡 十九楽吐月峰

第一編 60年の不作

第二節 初馬生活の悲喜劇

(ホ) 夜這追払い

片田舎には幼年、青年に何の慰安もない。活動写真も後年の映画館も勿論爪の垢ほどもない。お正月、お盆、秋祭位のもので常平時はただ黙々農事に追われて朝に明けて夕べに暮れて行く無味乾燥そのものである。

それだから青年——若い衆の遊び、気晴しは節度を越えての悪習が伝統になっていたらしい事は幼い八雄の目の前に現われていた。それは若い衆の夜這い行為だ。

坊ちやの寄生していた祖父母の家には前にも一寸触れておいた下男は通いの作男の老人だ。下女(オンナシュー)は年規定めの18, 9の娘で「鬼も18, 蛇も20」とか人骨骨柄は整っていないくとも、青年の目に留るのは陽陰の現象で仕方がない。そこで特定の若い衆と特定の女中とがいつか黙然たる仮りの契りを交して取引済となると夕暗の頃から一時千秋の思いで時の来るのを待ちこがれていて、老父母や坊ちやの寝静まる頃今やおそしと脱兎のごとく早く自称処女の静かなる方向へと表戸をスルスルと開けて忍び込む形跡が判る。そこで眠たい坊ちやをユリ起して夜這い追払いの内命が下る。そこで大命もだし危く八雄はやをら出動を開始して内土間に下りて天地も裂けよとばかり大声を張り上げて怒鳴るのである。急に黒い人影が裏口から疾風の様に退散して雲を霞と逃げて行く姿はあわれなりけり。横笛を慕う滝口入道の怨こそおそろし。

恋の邪魔をするものは犬に食われて死んで了……とか、小供心にも寝醒めの悪いものでアトアトはあまりこの老母の追払命令に服従せぬ事にした。ある時追払いを掛けたら、生憎外庭に壁土のドロドロがねつて広めてあつて、逃げ急ぐ暗黒の中でこのドロドロの内へ入り込んだため全身、土達磨になつた話も聞いて八雄も罪な事をしたものと後難を恐れた。

(ヘ) 老母のお道楽

明治中葉の昔でも新しい老母もあつた

もので、この初馬の老母でい子は男勝りの女丈夫で、祖父作兵衛の好人物をよい事にして芝居が好きで連れを誘つて、掛川町へ夜道1里も苦にもせず、旧派の十八番の名芸題が来ると見物に行く事も度び度びであつた。

もれ聞いた話だが夜更けて芝居がハネた後、小料理屋へ上つて馳走で1杯のみしかも女性の分限で芸者をあげて1騒ぎもする強者であつたらしい。

しかも余技も高じて長男を彦三郎、次男半四郎(八雄の実父の幼名)と名前まで旧派役者の芸名を付けたのだから、見方によつては沙汰の限りというべきではなかつたかと幼少坊ちやは思えてならなかつた。

(ト) 老母の競馬狂

寄生木先き初馬の祖父母の家に畜科動物で馬と猫がいた事は前節に述べた様な訳だが、この馬たるや肥踏み農耕用ではない。老母の競馬用の「小僧」という愛馬で、近くの隣村倉真村などの草競馬が始まると老母は血の道をあげてノボセ上り勝手に引かせて出場させて胸ドキドキして喜ぶのである。只の1度小結になつた時など長い馬の顔へ自分の丸い顔をスリ付けて歓喜の極声涙共に下る光景は少なからず頭へ上つているとしか思えなかつた。

さてその夜の勝馬祝賀の小宴にいつもの通り坊ちやは小店へ酒2升買いにやらせられた。今夕はオ目出度いだからと気を利かせて上酒をさげて帰つたら大目玉を食つて早速中酒に取り替えにやられた。矢張り気が利き過ぎると、間が抜けるものらしいとよくよく訓えられた。その代り小店でセンペイ20銭とアゲ2枚をコソソリ買ひ込んで、素知らぬ顔をして祝賀宴の馬の話聞いていた。

(チ) 日露戦争と乃木大将

時は日清戦争後10年——又々好戦国日本は露国と鏖を構えて一か八かの国運を賭しての日露大戦争が初まつたのである。この大戦争は八雄の初馬寄生木4年の後半2ケ年の真最中であつた。

学校の石川校長が新聞の号外を持って来て教壇の上から読んでくれるのが何より楽しかつた。

中でも旅順閉塞広瀬少佐や杉野兵曹長の奮戦、奉天戦の橋大隊長の戦死等々——血を湧かした事は後年中学生になつてから耽読して一生のファンになつた蘆花作品「寄生木」の良平も奉天戦に参加したのであつた。乃木將軍の旅順攻略苦

戦、愛兒2子を戦死させ世の幾多の戦死者の父母兄弟に合わす顔ありと涙をかくしての物語草は反つて世の同情を買ひ後日の軍神乃木大将の因をなしたのであらうと坊ちやは思われた。幸いにも日露戦争は日本の勝利に終つて乃木大将とステッセルの水師衛会見、白馬を貰つた話など盛沢山に戦争話は尽きず世人の口に賑つたのを八雄は後々まで覚えていた。

(リ) 坊ちや故山に帰る

日露戦争の終末と共に坊ちやも4年の小学校を卒業した。ところで病人の伯父母2人も永年大分八雄の腕白には手を焼いたと見えて次の様な手紙を持たせて故山菩提山に帰す事になつた。

八雄事年一年といはずらが増して来て之以上老人や病人の手におへぬ。そこで今度学校も卒業した事だからボダイへ返す事に相談一決したからお受取りの上一里の道を掛川でも袋井へでも通はせて高等へ入学させて下さい。

明治三十八年三月三十一日

久子

兄 上 様
姉 上 様

因みに久子は病伯母で井伊谷久子、宛名は八雄の両親新兵衛といく代である。この手紙は50年後いく代生母が84才で死亡したあと書類機の中から偶然八雄が発見して既に60才の八雄は感無量なるものを覚えた。即ち病伯母にして見れば薬瓶に水を替え玉に入れられた八雄に対する仕打ちかも知れぬ。結局悪い事はしてはならぬと50年後に後悔したが時既におそい「アトの後悔先に立たず」孝行をしたい時には親はなし。合掌、アーメン

よく考えて見れば4年もただ飯を食わせて貰つていたのだから、ここで居候の年貢の納め時であろう。居候置いてあわず居てあわず。

ここらで父母の膝下へ帰るのも人生行路の常道かも知れぬと往生して故山へ帰る事にした。ただ熊ちやや亀公、万公と別れるのが幸かつたが止むを得ぬ。

かくて坊ちやの八雄は幼少寄生木4ケ年を解除して故山菩提山の1軒家生家に御帰還と相成つたのである。

気の毒でおかしかった 古い思い出

石倉新十郎

わずか3万足らずの上田町に待望の国立学校が新設され、街に似合わぬ立派な校舎が建ちその威容を見た街の人も村の人も喜んで、学校職員と懇意になりたい希望が湧いたのであつた。県立蚕業学校長兼任の三吉教授を介して、小牧村青年会から千曲川附場漁の招待を受けたのである。校長初め少数の教職員も珍しさに酒の提樽を携帯して河原に行つてみると、すでに万端準備を調え待ち受けていたのであつた。付け場というのは本流を分水して幅4尺位の浅い小川を造り、これを横ぎつて簾を堰き、それから9尺ばかり下流の底に網を平らに敷き、繩をひけば網の一端が水面に出て下流も堰き止められるのである。水は7寸位の深さでハヤが群遊しているのが見えるのであつた。

上衣を脱いで小川に入り、教えられた通り足に触れる魚を静かに握れば、これは不思議、板上の魚をつかむと同様で、忽ちぎるが充つる有様であつた。余りの不思議さにこれは魔酔薬でも流し込んだのではないかなどの声に三吉教授が説明した。今は魚の産卵期であつて、簾の川上に巣箱が沈めてあり、中に数尾の雄魚が封入されそれが分泌する生殖液の魅力に誘われて下流から雌魚雄魚が集つて来、川底の小石に産卵するのであつた。吾々の捕り残した魚は青年が網で全部掬い揚げてしまつたのである。

筵の上に青年達と円座を囲んで、魚でんぐ焼天ぶらで酒宴が始まつたが、職員のうち漬物ばかりで杯を傾ける者を見て、校長が君は魚が嫌いですか。いや、さつきの話を聞いたら否になつたです。三吉教授が頭をなで、僕が悪かつた。魔酔薬の話などよせばよかつた。一座の興奮も青年達の動議で腕相撲が始まつたり、砂場では相撲が始まつたりで、漸く親睦が結ばれ感謝して別れたのであつた。

其2は留学から大滝教授が帰つて来た頃の話、職員の一部に刀剣愛好の熱が高まり、終に道場西裏に土壇場ができ、試し切りをするまでに発展したものであつた。土壇場というのはあき俵に霧を吹き

径1寸位の青竹をシンに巻き、丸め4カ所藁繩で固く縛つたのが人間の胴体に擬せられ、これを巻き藁というのである。これを3個水平を重ねて杭の間に固定したものである。刀は試し専用の柄末に固定し、両脚を横に開き大上段に振りかぶつて打ち下すのである。皎々と光る刀でも藁を1寸ばかり切込んだだけで撥ね返えされるのがあり、少々錆びても1つ胴切り割るものもある。業物と名のあるものは吾々素人の試しでも上ばかりか2つ目の竹まで切り離す凄さである。竹は筍のように輪切りにされ刃は何等異状がない。興に乗つて次から次と銘々が試すうち、剣道の先生が所蔵の刀を携えて試させてくれと申出たのであつた。2尺3寸位の光りを見て皆切れ味を予想しながら見守つてると、最上胴は切り離したが2つ目で刀に異状が起つたのである。あわれ刀はくの字なりに曲つており、押し試してみても救済の途がない。悄然と眺めている当人の眼には涙が光つている。これを見た校長はたまりかね、君諦め給え、僕が切れるのを進呈しよう。で一同の心は雲が晴れたように思はず吐息したのであつた。

其の3は古い卒業生は思い出すであろう。学校庭運動会の余興が学校の名物となつて街の人気を呼ぶようになり、仮装行列も逐年意匠をこらすようになった。婦人に擬装するものが現われ、これを気にした校長は学生課員を呼んで顔に白粉を附けないように注文したのであつた。それは早速学生一般に伝達されたのであるが、当日になつて見ると顔を白くしたのが出場準備中であつた。驚いた課員はその学生に洗顔を注意すると、これは白粉ではありません、うどん粉であります。そうか、うどん粉なら良からうで解決したのである。観衆の拍手喚呼に迎えられるで出場した行列を見た校長は不快噴満の顔で課員を呼び、君あれを見給え、顔に白粉を付けて居るではないか！ いえあれは白粉ではありません、うどん粉であります。聞いて校長の顔は直ちに平静に復したのであつた。そして観衆と共に笑顔でみるのであつた。

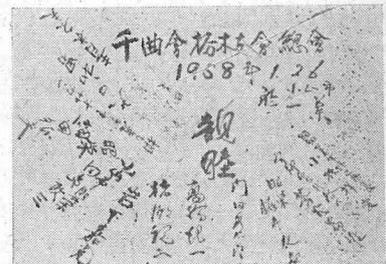
会員近況

栃木支会総会

松の香りもどうやら消えた1月26日(日)久方振りて栃木支会の総会を地理的条件を考慮して小山市において開催した。

栃木支会も宇都宮を中心として20余名の会員がいるはずであるが私達の活動が鈍いこと、県庁方面にも僅かに一人という極めて不利な条件に曝されているため、なかなか集合する機会を得なかつた。

今回は昨年11月23日千曲会代議員会に支会からも出席したので、特に緊急を要する次の問題を附議した。



- (1) 母校創立50周年記念事業について
- (2) 会費納入について
- (3) 支会運営について

以上の3点について芳谷代議員より詳細説明があつた後午後3時頃より懇親会に入つた。

高橋支会長を始め、猪瀬先輩は、出席せられる前に1杯召上つていたので、却つて座が開け極めて愉快な1日であり、特に支会長の余興、小林君のドジョウ掬い等は秀逸であつた。

なお、当日の出席者は、次のとおりである。(芳谷記)

支会長 高橋 記一(蚕8)

- 内田秀太郎(蚕10) 小林祥愛(紡27)
猪瀬 親二(蚕11) 岩下嘉光(蚕37)
芳谷 富雄(蚕24) 桜井友吉(蚕別1)
田島 政三(蚕31) 細田征夫(学糸3)
大口利男(学化3) 青木久夫(学糸5)

須田先生退官記念資金募集

募集趣旨にご賛同下さりまして、5月31日締切までに(締切を1カ月のぼしました) 応分のご拠出をお願い申し上げます。

岐阜支会設立準備委員会 発 会

岐阜支会はこの数年間全く冬眠状態を続けているのでありますが、岐阜のような重要地帯の支会が、このような状態にあることは、本会の会務運営上も極めて支障が多いので、同支会の再建問題は千曲会当面の一課題とされていたのであります。

されば本会では機会ある毎に同地の会員に呼びかけて支会再建を懇願してきた訳でありまして、このようなことが誘因となつた訳でしょうか。最近現地会員間にも支会再建の気運が次第に醸し出され、去る3月9日に岐阜市内在住有志の数氏が発起者となつて、岐阜支会再建に関する会合が開催されるに至つたのであります。本部からは野口理事長が出席し現地会員としては下記の諸氏が出席されました。此日の出席者あるいは遠路遙遙あるいは多忙中を万障差繰つて出席された何れも同窓愛に燃える諸氏であります、殊に鍵谷・日比野両先輩が遠路中の遠路を遙々出席された事は参会者一同嬉しく感謝する所でありました。

まず会発起者から、開会の挨拶及び此会を計画するに至つた趣旨及び経過報告が行われ、続いてこの会の目的である支会再建に関する諸事項が極めて熱心かつ慎重に約2時間に亘つて続けられて大体次の様な結論が打出されたのであります。

- 1 この会は岐阜支会設立準備委員会として今日から発足し岐阜支会再建の準備に当る。
- 2 正規岐阜支会が出来るまでの委員を次の通りきめる。
支会長 鍵谷 伝
副支会長 日比野一夫
会 計 井上 大
幹 事 此日の出席者全員
監 査 高橋 清司
代議員 鍵谷 伝、堀口友治
- 3 正規支会設立、総会開催予定日を8月24日、その会場は岐阜市内とする。
- 5 総会までに出席者全員分担して地域毎に会員への連絡および趣旨の徹底を図る。

議事が終つて後野口理事長からこの懸案が愈々軌道に乗つた事に対する感謝の言

葉が述べられ、その他本会最近の会務報告や50周年記念事業に対する協力の要請等々が行われて一旦会を閉じて小憩し再会後は岐阜人も参加して盛大な懇親会が展開された。

斯で久しく沈黙していた岐阜支会も愈々発足の見通しがつき、やがて東海の一偉彩として華々しい活躍が期待されます事は、本会発展上誠に意義深い事であつてここにこれをここまで持来つて下さつた発起者の各位及びこの日出席してこの計画に強く協力して下さつた諸氏に深く感謝の意を表する次第であります。

願わくは此準備委員会の計画が予定通り進捗して、来る8月24日には、堂に溢るる多数会員出席の下に東海における千曲会の有力拠点たる岐阜支会がたくましく発足出来ませう様祈念してやみません。

当日の出席会員(順序不同敬称略)

井上大、堀口友治、三宅静雄、関文夫、相沢清正、日比野一夫、柳沢信、西島久文、高橋清司、鍵谷伝、倉沢秀夫

(野口記)

更埴支会総会の記

若 林 茂 一

更埴支会の総会は3月2日午後、地元温泉郷上山田鷹美旅館において開催された。ネオンの舗道に淡雪の降つては消える宵帷の夕べである。

出席者は20数名、学校の教員の多い地区で丁度学年末だつたので、先生方の出席の少かつたのは遺憾であつた。又大先輩である飯島正胤(蚕2)が欠かさず出席されたのに今年は御都合で見えられず一抹の淋しさを感じさせたが、しかし続いての先輩久保田正樹、小林勲、飯田儀作の諸氏の顔が揃つて、老人組も仲々の氣勢を示していられた。

先ず会議に先立つて、会員湯原諄氏(紡7)が印度で撮影された8ミリのカラー映画を公開された。2回に亘る渡印で日本繊維技術の優秀性を示して来られたのであるが、それらについての詳細な解説とともに、映し出される彼地の繊維産業の状況や、珍しい風俗、美しい風景に、宿の主人や番頭女中さんまで加わつて約1時間20分の楽しい時を過した。

続いて総会。茂原支会長のユウモアに

富んだ、しかも要領を得た挨拶の後、次回以後の会の持ち方や、支会強化方策等について熱心に協議が行われた。その後私から本部の現況報告と、50周年記念事業の説明を行つたが、やはり関心はこの問題に最も深く、事業内容、募金額、募金方法等について原案として考えられる点について説明を行い、かつ会員各位の忌憚のない意見や希望が開陳されて、非常に有意義であつた。出席会員は全員本部案に賛同されて、この世間の事業を完遂すべく協力をちかい、又本部に対し激励鞭撻をして下さつた。私も非常に意を強うした次第である。

その後50周年記念事業実行委員3氏の選出を行つて、会議を閉じたのである。

続いて懇親会、老若の隔てを去り、愉快にかつたごやかに、徹談の尽きるところを知らなかつた。

私は上小、南北佐久、更埴の3支会を本部の親衛近衛師団と呼んでいる。更埴は近衛第3連隊である。近衛師団は最も精鋭でなければならない。果してこの第3連隊は連隊長、幹部、一兵に至るまで極めて精鋭で、全国39連隊の内最右翼に位置している。

私自身植科出身であり、植科在住である関係から、昭和5年第一回の更埴同窓会を開催した時からの幹事であつた。幹事が出席しない会は存在しないので、1度も欠席した事はなかつた。最近3年程勤務地を他に移した関係で、支会出席が出来なかつたが、本席久しぶりに旧知の会員各位と談る事の出来たのを何より嬉しく思っている。本来私が支会総会等に出席すべき筋合いではないが、理事の先生達にいずれも支障があつて出席出来ないで、代つて私が出席したのである。この意味で先生方の忙しかつた事は、私にとっては望外の幸であつた。

最後に、この会を計画司会して下さつた支会役員の方々に謝意を表し、且つ更埴支会が今後一層の発展を遂げられるよう祈つて擲筆する。

お 知 ら せ

編集部員清水周(化9)は急に上田(松尾)高校に転任になつたので三石賢(化9)がその後任として活躍することになりました。

空前絶後の同級会

香山 清和

なんで空前絶後かというを先ず第1にそう誇り得るのは同級会が全員出席であったということである。その次にこれは余り自慢にならないが人数が少いという事である。僕の級、紡3は入学した時が9人、卒業の時が7人、その内、間もなく田子英人君が病死、次いで林太郎君が昭和入組綿工場で殉職し、浜君、宮本君、碓氷君、小松君と僕の5人だけになってしまった。この5人は何れも悪運強くどうやら無事に今日まで永らえて来た訳である。

僕が昭和28年上海から帰国以来、浜君には僕が上陸の際舞鶴まで態々人を寄越して呉れた礼かたがた同君を神戸に訪れ、宮本君には上京の途次訪れ、碓氷君には君が南米の話で母校へ来た時に会った。色々話していると言い合したようにもう余り長生きも出来ないから誰も欠けない内に同級会をやるうじやないかという話が出た。

こうした会合の発起人は大抵の場合、中で景気のいい者がやるのが普通であるので、僕はその意味で最も不景気の方から不適任という事になる。がしかし母校に近いことと距離的に中央にある点からその義務があると考え発起人を買って出た訳である。そして1月中頃旬「別所か上山田で2月末か3月始めに同級会をやりたい。人数が少いから全員の出席を絶対条件とし1人欠けても中止する」と通知を出した。折返し碓氷君から「賛成、まかせろ」といつて来た。半月許り経つて浜君から「大賛成、一任」の返事(会つて聞いて見ると見て直ぐ返事を出したのだそうで、見るのがおくれた訳である)と共に「距離が遠いから2月末東京へ出る序でにやれるようにして欲しい」と希望して来た。

それで一応3月1日、2日別所温泉において開催に心を決めた。日が決まると心がせかれてくる。返事の来ない宮本君と小松君に督促状を出した。直ぐ宮本君から「前のハガキは知らなかつた。大賛成」といつて来た。小松君からは返事が来ないのでまたハガキを出した。行き違いに「結構です。万障繰合せ参加する」との返事が来た。これで全員の賛成を得たので会場は別所の主、倉沢大人に頼み

花屋ホテルと決定した。そして全員に正式の案内状を出した。

開催の当日3月1日(土)には僕は長野へ一寸出勤して仕事を済ませた後、長野発11時45分の列車で上田着、電車に乗換えて別所温泉花屋ホテルに至る。すでに宮本君は到着しており一風呂済ませた処であつた。2時頃浜君が令嬢同伴にて到着する。3時頃小松君が来る。宮本君と浜君、小松君との対面は卒業以来始めて、実に34年振りとのことには驚いた。僕は小松君以外には28年以後に会っているし終戦後始めの小松君にすら昭和17年満州で会っているの誰も同じ位に考えていたので実に意外であつた。そんなに別れていても途中ならいざ知らず会えば顔は覚えているとの話であつた。

お互の間で、今どんな仕事をやっている、子供は幾人ある等々の話が出る。待てど暮らせど碓氷君が見えない。とうとうあきらめて七時頃から懇親会に入る。酒豪で聞こえた浜君が病氣以来1滴も呑まないとてジュースで間に合わせたのには感心仕つた。興は尽きざれど酒、料理は尽きて追加を頼む。9時頃上田の島田林助君から電話で、碓氷君が10時の列車で来るとの連絡があり、11時半頃待望の碓氷君到着する。これで全員出席の悲願は達成し空前絶後と誇り得る同級会は成立したのである。幹事の顔が立つた訳である。碓氷君の無理して馳せ参じて呉れた事に感謝した。特に明2日は奇しくも宮本君と小松君の誕生日だと聞いてこの良き日を選定した幹事の先見の明を威張つて見せた事である。それから又話に花が咲いた。宮本部長が新潟で偶然碓氷開拓館長に会い厄介になつた話、浜社長の瓦製造苦心談(瓦を製造したい人には秘訣を伝授して呉れるそうです)、小松議長の新発展策の1くさり、碓氷理事の南米物語、僕の中共話、宮本社長の金融のコツ話等々延々として続き就床したのは1時半頃であつた。

話の中から纏めた諸君の身許調べは次の通りである。(氏名、商売、2世の数順、若し違つていたら御免なさい)

- 小松忠一郎君 町会議長、農協理事、なし。
- 浜 香三君 製瓦、製材会社々長、県蚕種連会長、男2、女2。
- 碓氷 茂君 高校の先生、日本海外協会理事、男1、女4。
- 宮本静雄君 金融会社々長、男2、女1。
- 筆者 得体の知らない団体役員、なし。

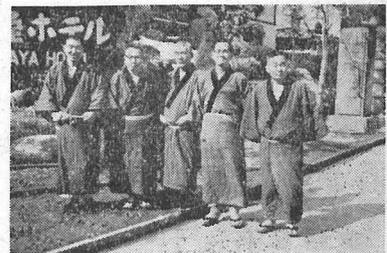
翌2日(日曜)は9時半頃打揃つて朝食を済ませ諸先生、諸先輩に寄書の便り

を出す。ホテル前で記念撮影をする。

もう全員揃う事も余り長くはないと考えられるので来年4月頃再び同級会をやる事に話がきまる。幹事は宮本君、会場其他一切は幹事にまかせる。(千葉で温泉兼汐干狩の予定)ただし小松君夫人から同級会には夫人をも加えるべきだとの意見があつたとの事なので次回は夫人同伴と決定した。

未だ話は終えず名残も尽きないのであるが、浜君が善光寺で半田孝海大僧正に会い長野見物し長野発1時56分の急行白山に乗りたいとの希望なので11時50分発のバスで発つ。浜君と令嬢をホテル前で送る。その後残りの4人でまた話が続き昼食を共にし心を残しながらホテルを出たのは1時頃、電車で帰る小松、碓氷、宮本の三君を見送り僕は倉沢大人宅へ向つた。

この会合には野口兄に参加して貰うように話をして置き計画にも骨折を頼つたのであるが突発的の急用のため出席願えなかつた事は万事予想外にうまく行つた中のたつた1つの心残りであつた。



最初の計画では林、田子両君の墓参、母校訪問等々甚だ盛沢山であつたが、碓氷君の遅参、浜君の帰り急ぎ等により計画倒れになつてしまった。尤も計画そのものが無理でロマンスグレーの同級会などはただ湯に入つて話して呑んで碁を打つ文位が分相応かも知れない。時間がなかつたので写真は3枚写しただけで終りフィルムの残りを写すのに幾日もかかつてしまった。文章は早く書けたが写真のために遅れたという訳である。

寄書を送つた先生の内、石倉先生から3月5日付で僕宛に次の様な便りが来た事を報告する。

寄せ書きを頂いて東西からよくも諸君が集つたものと面々に出逢つたような感にうたれました。文字の書き振りで諸君それぞれの今の健康気分が想像できて嬉しさとなつかしさで一杯です。小松君以外の人達は皆お子さんがあると思う。自分の孫を見るにつけ各々これから先の楽しみを思う諸君の心中が思いやられます。

吾を他に子の先思う親心
伸びゆくさまに尽きぬ楽しさ

(写真は別所温泉花屋ホテル前にて 左から宮本静雄君、小松忠一郎君、浜香三君、僕、碓氷茂君)

昭和33年度信州大学纖維学部入学許可者

養蚕学科

阿部 勝昭 山形鶴岡南高
青木 貞夫 埼玉熊谷高
石川 行 之 岡山成羽高
大井 一 郎 野沢北高
大池 昶 威 北佐久農業高
大沢 正 夫 埼玉川越工業高
木村 功 之 大阪堺工業高
小林 幸 雄 千葉市川高
小林 善 晴 小県蚕業高
小宮山 源一 郎 上田高
佐藤 宏 宮城仙台第一高
清水 孝 夫 丸子実業高
土屋 幸 信 上田高
坪内 孝 夫 愛知明和高
富岡 稔 群馬太田高
中村 清 功 丸子実業高
服藤 功 上田高
保屋野 篤 男 小県蚕業高
松原 喜 光 小県蚕業高
水谷 浩 之 北海道函館中部高
宮村 秀 夫 滋賀虎姫高

製糸学科

今井 裂 幸 野沢北高
大久保 琢也 東京城南高
岡田 繁 治 郎 京都同志社高
岡部 哲 昭 東京都立広尾高
小山 清 夫 三重四日市高
岸田 国 興 屋代東高
近藤 邦 男 埼玉熊谷高
近藤 清 一 郎 新潟長岡高
坂本 脩 熊本玉名高
篠原 和 彦 野沢北高
鈴木 武 柄木足尾高
春原 正 心 屋代東高
谷川 潔 愛知常滑高
堤 勝 二 愛媛三島高
中村 康 二 野沢北高
成田 尊 行 愛知愛知学院高
松田 二 郎 奈良大宇陀高
南山 修 一 鹿兒島川辺高
山田 昭 久 岡谷南高
山田 薫 静岡沼津東高
山田 薫 新潟高田高
山田 薫 愛知横須賀高

山田 泰 造 愛知津島高
若林 久 三重宇治山田高

紡織学科

猪狩 征也 岩手水沢高
石川 宏之 愛知西尾高
岡島 克彦 三重四日市高
河西 敏勝 諏訪清陵高
黒川 貞澄 香川尽誠学園高
小泉 幸道 上田高
小出 明良 愛知半田高
小見 平 徳 郎 上田高
小松 市 太 郎 松本深志高
小山 貴 司 長野高
柴田 圭 彰 三 上田高
清水 卓 雄 大阪三国ヶ丘高
高橋 洋 旭 上田高
寺沢 豊 子 新潟佐渡高
轟 道 彦 長野西高
中岡 弘 一 徳島小松島高
長橋 拓 一 新潟柏崎高
中村 和 美 也 犀峽高
浜田 俊 次 兵庫姫路南高
平田 崎 利 夫 北海道余市高
宮下 健 司 上田高
柳原 英 雅 屋代東高
山口 康 男 長野高
和田 利 博 香川観音寺第一高
和田 利 政 京都洛北高

纖維化学科

相沢 義 英 長野高
赤尾 彰 一 岐阜大垣南高
安部 吉 昭 松本深志高
有賀 毅 新潟高田高
岩月 誠 愛知刈谷高
緒方 邦 夫 大阪北野高
押田 洋 飯田高松高
小野 裕 司 松本深志高
甲田 英 行 上田高
小林 忠 弘 中野高
小松 柴 一 松本深志高
駒津 達 夫 須坂西高
佐藤 和 夫 上田高
佐渡 本 克 介 兵庫尼崎高

塩川 莞 爾 上田高
清水 邦 穂 上田高
清水 昌 彦 上田高
白井 利 彦 上田高
白鳥 峯 子 伊那弥生ヶ丘高
鸕見 保 俊 上田高
高田 公 雄 東京鷺宮高
田中 信 一 上田高
寺島 英 夫 長野高
内藤 志 一 野沢北高
中野 達 彦 愛知刈谷高
西川 満 佳 岩村田高
野村 広 治 神奈川三崎高
柳 沢 明 上田高
柳 才 子 長野西高
若林 忠 之 上田高

養糸別科養蚕課程

甘利 紘 山梨農林高
飯島 守 一 小県蚕業高
石川 幸 男 松代高
今井 利 忠 屋代東高
岩崎 健 一 鹿兒島志布志高
窪田 政 夫 中野高
小池 三 夫 富士見高
清水 守 勝 小県蚕業高
春原 裕 小県蚕業高
永井 良 治 蓼科高
中村 宗 作 小県蚕業高
久松 定 賢 小県蚕業高
牧 泰 明 須坂農業高
三井 勝 美 小県蚕業高
横山 十三 男 宮城志津川高

養糸別科製糸課程

伊東 和 子 長野吉田高
片桐 輝 子 蓼科高
小泉 人 美 岩村田高
清水 香 公 子 小県蚕業高
相馬 満 代 丸子実業高
高藤 康 代 小諸高
滝沢 幸 三 丸子実業高
藤田 志 津 子 岩村田高
田口 晁 子 岐阜武義高

信州大学纖維学部第6回卒業生

養蚕学科

安達卓三 日本レイヨンKK (大阪市東区今橋)
 新井直理 塩原蚕種株式会社 (前橋市田口町)
 今村正則 自営 (下伊那郡川路村)
 尾崎正忠 須藤製糸KK (茨城県古河市古間)
 菅野邦夫 福島県安達郡二本松町安達蚕業指導所
 高橋達夫 信大専攻科
 滝沢安夫 同上
 武井佐三 愛知県蚕糸課 (名古屋市)
 田中毛孝 愛知県信用組合上田支店 (上田市海野町)
 舎利弗 埼玉繊維工業KK
 中山山忠 愛知県蚕業試験場岡崎支場
 直尾利泰 農林省蚕糸試験場 (杉並区高円寺)
 西川静夫 信大専攻科
 平林昭恒 信大繊維学部古平研究室
 古丸山毅 京都大学農学部遺伝学教室 (京都市左京区)

川茂男 小泉研究室
 坂弘夫 千曲蚕種製造所 (埴科郡埴生町)
 望月武則 岡治兵衛商店研究部 (上田市原町)
 望月浩治 愛知紡績KK (愛知県安城市)
 森田健俊 片倉蚕業研究所 (松本市蚕玉町)
 柳野信玄 群馬県蚕業試験場 (前橋市総社町)
 木内馨利 信大専攻科
 小本光 竹田研究室
 片倉普及 團蚕種製造所 (松本市蚕玉町)
 神榮製糸KK (東部町田中)

養蚕別科

井澤新 農林省蚕糸試験場竹豊支場
 薄葉孝一 岩手県農協 (一ノ関)
 金井米二郎 日本レイヨンKK長野出張所
 岸田勝美 昭製製糸KK本庄工場
 小木林利夫 鹿兒島県養連
 近藤邦彦 利根シルクKK (伊勢崎市)
 清水康郎 日本シルクKK松山工場
 高見次敏 信大竹田研究室
 中島貞也 日本シルクKK松山工場
 西野国正 片倉沼津蚕種製造所
 平原山正 長野県養連長水支部
 藤松木清 天竜社原料課
 満山浦清 日本レイヨン長野出張所
 山岸光三 龜山前橋乾繭所
 米山治三 須藤製糸KK (茨城県古河市)
 南信社蚕種製造所
 鐘紡蚕業研究所 (愛知県春日井市上田楽)
 長野県養連南安曇支部
 信大竹田研究室
 龜山製糸前橋乾繭所
 片倉龍崎製糸所

製糸学科

安石藤井 生衛 丸ヤマ産業KK (岡谷市成田町)
 池田久保 勉 農林省神戸生糸検査所 (神戸市葺合区浜辺通8)
 伊勢義彦 愛知蚕検定所 (豊橋市前田南町)
 大久保孝 地方公務員 (岐阜県)
 片岡保 酒六KK (愛媛県八幡浜市)
 久保谷良一 東信製糸KK (小県郡丸子町塩川)
 中央商會 (松本市和泉町)

五井弘 宏利
 椋藤幸 夫
 佐島幸 稔
 関高木 久
 田中村 文
 橋詰名 恒
 浜古川 定
 細宮田 泰
 山岸美 喜
 山多 照

製糸別科

赤塚さ と 子
 荻原弘 子
 小倫 子
 近藤明 子
 佐々木葉 子
 清水恒 見
 高山谷光 良
 中保母 江
 宮八郁 巖
 依田卷 洋
 綿渡田 介
 渡辺正 子
 智子 子

紡織学科

島飯迪 夫
 池田六 視
 伊藤川 雄
 伊市行 洋
 大金滝 長
 金田子 徳
 久保田 久
 坂田義 隆
 清水水 人
 白石石 治
 土屋重 治
 角田忠 男
 土井孝 良
 中島正 治
 中西美智 男
 羽村文 夫
 羽賀正 孝
 林郁 美
 細田郁 男
 町田純 正
 宮宮本 雄
 村松博 之
 敷田弘 喜
 吉池一 昭
 渡辺 明

高姫社 (北安曇郡池田町)
 橋館製糸KK (深谷市西島)
 岩手県地方公務員
 信大繊維学部専攻科
 近藤工業KK (東春日井市高藏寺町)
 新潟県精練工業KK (五泉市)
 全日本検査協会本部 (東京都)
 東京靴下KK (横須賀市本町)
 利根シルクKK (群馬県沼田市蕨根町)
 自宅 (上水内郡鬼無里村瀬戸)
 愛知繭検定所岡崎支所 (岡崎市明大寺前)
 神織興業KK (神戸市生田区織維間屋街)
 昭製製糸KK (東京都千代田区神田駿河台)
 大和組製糸KK (埼玉県児玉郡上里村)
 多勢製糸KK (福島県)

北信生糸KK (長野市中御所)
 富士精密三鷹工場
 石橋生糸KK我孫子工場 (千葉県東葛飾郡我孫子町)
 須藤製糸KK松原工場 (古河市)
 同 上
 自宅 上田市染屋
 自宅 上水内郡小川村高府
 丸興製糸相模工場 (藤沢市)
 美濃繭糸販運工場 (美濃市)
 自宅 小県郡東部町瀬津東町
 自営 (福島県梁川町大町)
 須藤製糸KK松原工場 (古河市)
 同 本部工場 (古河市)
 同 松原工場 (古川市)

若林製糸紡績KK (大阪市東区安土町)
 岡本莫大小KK (奈良県北葛城郡馬見町三吉)
 山田紡績KK (愛知県半田市)
 東洋ナイロン編物KK (富山県東礪波郡井波町)
 郡是製糸KK (綾部市)
 厚木編織KK (神奈川県高窪郡海老名町)
 敷島紡績KK (大阪市東区備後町)
 坂本紡績KK (大阪市泉南郡田尻)
 日東紡績KK (東京都中央区八洲)
 東海紡績KK (一宮市大和町氏永)
 中越印刷製紙KK (富山県砺波市)
 柳沢精機製作所KK (坂城町)
 坂本紡績KK (大阪府泉南郡田尻町)
 オイルレスベアリングKK (東京都港区芝西久保)
 平仙レースKK (埼玉県入間郡西武町)
 大府紡績KK (愛知県知多郡大府町)
 宮野鉄工所 (坂城町)
 富士紡績KK (東京都日本橋本町)
 専攻科
 栄工業KK (尾崎市常吉)
 東洋レイヨンKK (東京都中央区日本橋)
 綾羽紡績KK (大阪市東区安土町)
 倉毛紡績KK (大阪市東区南久宝寺町)
 東洋繊維KK (広島県三原市館町)
 川島紡績KK (京都市上京区東堀川通)
 呉羽紡績KK (大阪市東区本町)
 大日本紡績KK (大阪市東区安土町) (選科)

繊維化学科

乾 康 利 厚木編織KK (神奈川県海老名郡海老名町)
岡 本 功 静岡加工紙KK (清水市吉川)
岩 淵 修 帝国人絹KK (岩国市今津)
小野 沢 信義 東洋レーヨンKK (大津市石山)
小日向 嘉道 高見沢電機製作所 (長野県南佐久郡中込町)
木藤 健一郎 東洋繊維KK
北村 賢 森保産業KK (尾西市三条)
桑 原 滋 川捨工場KK (新潟県三条市)
小池 明 大洋安襪KK (京都市左京区田中門前町)
小林 敬明 ライオン脂KK (東京都江東区大島町柏木高美方)
小林 茂夫 渡玉毛織KK (尾西市三条)
小松 好人人 大和紡KK (大阪市東区南久太郎町)
小坂 口 嘉人人 信大繊維学部
島田 和美美 日本化業KK (広島県福山市三吉町)
竹田 腰 彰次 五光染工KK (大阪市東淀川区相川町)
土屋 勝俊 和染KK (和歌山市中ノ島)
東洋繊維工業KK (大阪府和泉市府中町)

中 沢 孝 繊維工業試験所 (横浜市神奈川区沢渡)
西 川 梯 雄 竹仁染化KK (滋賀県野洲郡守山)
前 田 勝 啓 横浜税関
三 原 寿 恵 男 富士紡績KK (静岡県駿東郡小山町)
山 中 美 津 子 日本ライヒホルードKK (東京都文京区大塚仲町36小林佐源治方)
輪 湖 朝 雄 大同染工KK (京都市南区唐橋南琵琶町)
渡 辺 嘉 明 東洋紡績KK (東京都墨田区吾嬬町)
森 本 功 東京教育大学大学院
原 博 昭 信大繊維化学科
中 沢 春 美 同 上
専 攻 科
小 出 幸 長 上田市立博物館
小 林 啓 次 三 母校遺伝学研究室
清 水 屋 隆 三 富山紡績KK福野工場 (富山県東砺波郡福野町)
土 屋 高 島 忠 富山紡績KK福野工場 (富山県東砺波郡福野町)
高 島 忠 富山紡績KK福野工場 (富山県東砺波郡福野町)
宮 坂 啓 象 蝶理KK (大阪市東区安土町)
飯 田 善 彦
花 岡 靖 靖

母校だより

△本春学窓を巣立つ者は本科99名、繊維学専攻科5名、蚕糸別科37名、選科8名、合計149名であつて大学院の進学等1、2の特殊事情の者を除いて全員就職が決定し、それぞれ赴任決定した。その状況は別表の通りである。
△33年度入学宣誓式は4月12日午前10時から佐藤学長、伊藤学部長、井上学生後援会長等の出席を得て厳粛に行われた。入学許可者は本科127名、別科35名であるが昨年同様県外者が6割に近く、北は北海道から南は鹿児島におよんでいることは別表の通りである。

本会日誌

- 3月9日 岐阜支会開催さる。岐阜市に於て、本部から理事長出席、別記事参照。
- 3月10日 母校卒業式に祝辞を呈す。尚新卒業生に対する記念品として千曲会より証状入れ筒を贈る。

須田圭二先生退官 記念資金受領報告

(4月5日現在)

- 金 500 円 清水 統 (蚕20)
高田正気 (糸25)
- 金 400 円 松井忠計 (学糸1)
滝沢昌一 (蚕26)
- 金 200 円 笠井利之 (化6)
- 小計 金2000円
- 累計 金8000円

編 集 後 記

桜の花を追うように青葉がもえだしました。新入生を迎え学校もひときわ春のけはい濃厚です。

本号は私の当番にあたりましたが、編集半ばに急に上田高校(松尾)に転任することになりましたため、種々の支障を招来し、編集、校正とも意にそわぬ点が多く、また発行も遅れましたことを深くおわびいたします。(清水 周)

編集理事

田 口 亮 平

編集総務

小 山 長 雄

部 員

白井 美明

美津津利正

柳沢 幸雄

一之瀬匡興

西山 久雄

清水 周

— 近刊予告 —

昆虫の実験

小山長雄 著

A 5判. P. 230, 美装, 価未定

5 月末日発刊!!

現在理科教育に重点が指向されつつありますが、お互に設備のないことと、何をどうしてやつたらよいかに迷います。小山博士の今回の書物は、小・中・高校の教師のために、単元にてでくる昆虫をつかい、いかに観察し、いかに実験し、いかに体得するかを、教示しようとするものです。全10章よりなり、研究項目は500題にのぼっています。そのうちの少くも2割があなたに役に立てば、100のテーマがあなたに与えられたことになるのです。

発行後千曲会にて依託販売します。

陸 水 社

(東京・大田区・入新井 4-112